

## 地域学習における地図の活用 ——義務教育からの指導、実践報告——

原 高 則

### 1. はじめに

地域学習における指導者の地図活用に対する関心は高いと言える。それは、例えば、埼玉県における地域学習研修会の場合にも、毎年講義内容として地図の活用が取り上げられ参加者の関心の高いことから分かる。

また、一般社会における地図の普及、活用という面を考えても盛んになっていると言える。私たちの身近な生活の中で、道路地図等の利用が活発であることなどその証左である。

しかしながら、学校教育の中で、特に社会科における地図の活用、地図指導の面を考えると問題がいくつか認められる。地図指導の系統性確立への努力が停滞傾向にあることや、地図の資料としての活用が不十分であるということ等である。

こうしたことから、本稿では地域学習における地図の活用を考え、地図指導上の問題についての対策を述べてみることにしたい。また、地図指導の際に、航空写真への生徒の興味を地図指導に生かすことも活用のあり方としてとり入れてみたい。

### 2. 航空写真への興味

たいがいの学校には何枚かの航空写真が掲げられている。筆者の現任校（越谷市立北中学校）においても創立20周年記念、そして30周年記念の航空写真がある。学校を中心とした学区の写真が空から写されている。これらの航空写真に生徒は強い関心を示している。

これらの写真に生徒の興味・関心が強いのは、空からの自分の生活経験のある範囲を俯瞰できるからである。いわゆる鳥人となる喜びであろう。特に空からの興味の対象となるものは、自分の生活経験の関わりが強いものである。学校や自分の知っている建物、道路、又は川等の自然も興味の対象になる。このように空からマクロに物が見える体験や興味を大縮尺の地形図指導に関わらせる

ことは地図指導の面で効果のあることである。すなわち、航空写真によるマクロな視点と、大縮尺の地形図指導等のミクロな視点との組み合わせは学習への興味を増幅させるということでありたい。効果がある。

たとえば、航空写真により地上構築物等の形状、また、カラー写真の場合は色合いを見ること等によってその地域の地形等の特色の理解に役立たせることができる。

### 3. 生活への地図の活用

私たちの生活への関わりが強い地図が身近な所に数多く見られる。例えば新聞を見てもニュース記事を中心にして地図が添えられていることが多い。これらの地図は記事の内容を簡単にわからせるのに役立っている<sup>1)</sup>。新聞の中に折り込み広告が入ってくることも多いが、殆んどのが地図入りである。これは宣伝のために、位置を知らせることの大切さを物語っている。

同様に、位置を知らせる大切さで利用が多いのは住宅案内図や観光地図であろう。道路地図が近年、多く利用されているが、それも、位置を早く正確に知らせるといふ同様の役割からと言えるであろう。

古くは、地図の活用は、一部の登山家等に限定されていたが、一般にも地形図の利用があったことを忘れてはならない。

このように、一般社会の中では、地図は位置を知らせることを主として、十分な地図の活用、いふならば生活化がなされてきた。しかし、それに対して学校教育、教育指導の中での地図の活用が十分図られているかという問題がある。

### 4. 地図指導上の問題点

社会科の授業において、地理的内容を取り扱う場合、最近では地図帳、掛図、地球儀等が余り使われなくなっている現状にあることは問題である。

授業を参観する機会があるが、しばしば教科書中の地図類があまり活用されていないことを見かける。地理学習において、地図とかけ離れた学習、地図利用を欠く学習が展開されることは問題である。

これらの問題点の原因として考えられることは、一つには社会科の教科目標が公民的資質の育成に偏り過ぎるからではないかと考える。すなわち、公民的資質の育成を政治、経済、社会制度面の教育に比重を置いて考え過ぎるからであろう。社会科の目標をこの点について再検討し、指導法の改善が望まれるゆえんである。

## 5. 社会科学習における地図の活用

社会科における地域学習及び地理学習の学習目標を地理教育に設定することを考えたい。すなわち、学習目標を、「分布を考える、地域を考える、自然と人間の関係を考える、そして地理的見方、考え方を養なう」ことに置くことが必要であろう。社会科学習の目標及び方法に、いわゆる地域論、分布論、環境論を踏まえることであり、このことにより地図の活用を盛んにすることが考えられる。

地図は単なる位置を知らせる道しるべとして活用されるだけでなく、社会科の資料としての価値、役割を考えることが重要である。寺田寅彦は「1枚の地図は知識の宝庫であり、地図記号は宝の入口を開ける鍵」といっている<sup>2)</sup>が、この言葉は地図の資料としての価値の高さを物語っている。中野尊正、大久保武彦は我が国の図式教育の不足を指摘している<sup>3)</sup>。

ことさらに、地形図指導の学校差、地域差が大きいことも我が国の地図指導上の問題であるという指摘がある<sup>4)</sup>。この点からも地図指導の系統性や地形図指導の指導段階についての検討が必要である。次に、このことについて述べてみよう。

## 6. 地図指導の系統性

地図指導の系統性を考える場合、小学校段階の指導等は基礎的なものとして大切である。小学校の地図指導では一般に次の3段階での指導が考えられている。

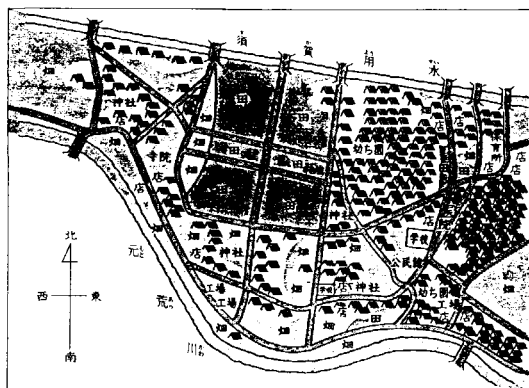
低学年においては、実景的、絵画的表現を中心

にすること。中学年においては、平面図化、記号化を中心にする。高学年においては、記号による実景の創造を中心にするのである<sup>5)</sup>。

小学校の指導の中では、特に中学年における指導がそのポイントとされている。埼玉県越谷市教育委員会作成の副読本「郷土こしがや」の絵地図づくりを参考にしてこの指導の在り方を示してみたい。〈資料1〉

絵地図づくりにおいては、児童の通学路等を中心にした生活経験が豊かな範囲を絵図にしたり、さらに可能な限り地図記号にさせること。観察や経験を重視し、絵や記号にするトレーニングを行わせることが望まれる。図化する際に、基本のおおさえとして、北（中心となる方位）のおおさをまず最初にして、主な位置を決定する川や道路の

〈資料1〉



大袋小学校のまわりの絵地図

- ① 絵地図をかくじゆんじよ紙の上を北にする。
- ② 道路、川、用水、鉄道などをかく。
- ③ めじるしになる大きなたて物をかく。
- ④ 土地りようのようすをかく。(田、畑、じゆうたく、商店の多いところ)
- ⑤ 記号であらわせるところは記号でかく。
- ⑥ 見学でみおとしたところは、写真をみてかきこむ。

位置を決めてから書かせること。さらに、細かな建物や自然等の景観を書かせる。また、絵図にすると共に事物を記号にできるものは、児童の能力に応じて自由にさせていくことが大切である。

観察や経験を補足する意味で、学校の屋上からの俯瞰、関係する地域の航空写真を併用することも絵図づくりには効果がある。

記号による实景の創造（再現）とは地図、特に大縮尺等の地図を見せた時に、児童が実際の景観を想像できるということであろう。このためのトレーニングとして考えられることは、航空写真や野外観察、屋上からの俯瞰と地図の見比べをくり返し経験させることである。このことにより記号と实景との関係が強く認識されるようになってくる。

さらに中学校段階では、小学校段階での地図指導の系統性を踏まえた上で、地形図使用の段階的指導がなされることが必要である。

次に、地形図指導においては、4段階が考えられる<sup>6)</sup>。すなわち、地形図の基礎的指導、発展的指導、応用的指導、実用的指導であるが、次にこの指導の段階について述べてみる。

まず地形図の基礎的指導とは、身近な地域での指導にあたるものであり、発展的指導とは地誌学習における指導にあたるものである。この2つの段階は中学校地理的分野における地形図指導の主要事項である。この具体的指導の在り方については後述する。

次に、地形図の応用的指導とは、教科外の指導を指しており、遠足、林間学校、修学旅行時の地形図指導の機会等をいう。基礎的指導、発展的指導とともに応用的指導にあっては、関係する地域の地形図の集中的指導を実施すると効果がある。集中的な指導とは、読図や作業に十分時間をかけ、1枚の地形図に徹底して習熟させることである。応用的指導の際には、20万分の1の地勢図の併用が効果的とされている<sup>7)</sup>。

さらに、実用的指導とは、災害に関する地形図等の活用を指している。例えば、水害地形分類図が台風災害の予防、対策、あと始末に役立てられること等である。生涯学習時代と呼ばれる今日、地形図の一般社会における活用は望ましい方向であって、このため、学校が地形図使用の面でも地域社会への指導、啓蒙をより一層図るべきで

あろう。以下、地域社会への啓蒙の在り方について述べる。

河川情報センターでは、直轄河川防御対象氾濫区域図を発行して河川の氾濫の予防に努めている<sup>8)</sup>。利根川流域の氾濫区域図を見ると、埼玉県東部地域の氾濫区域と地盤の高低差が3色に色わけしてあり、洪水の起こり易い地域が予想できるようになっている。学校が地域社会へこれらの氾濫区域図の紹介を積極的に行うのも、実用的指導と言えるであろう。したがって、このような指導の機会を大切にしていきたいものである。

## 7. 地域学習のための地図

小、中学校の地域学習の地図指導にとって、最も多く活用される地図は、中・大縮尺の地図である。中・大縮尺の地図は2,500分の1、5,000分の1、10,000分の1、25,000分の1、50,000分の1等あるが小、中学校の指導では50,000分の1の地図の使用が最近では減っている。つまり、2,500分の1等の大きな縮尺の地図が増えて50,000分の1の地図の利用価値が減っているからである。国土基本図2,500分の1の地図は、地域学習の地図として扱い易い。なぜならば、この地図によると図の中から、一軒一軒の家の大きさや形までがわかり、小学校低学年の児童から中学校の生徒に至るまで理解し易いからである。ただ、2,500分の1の基本図は、埼玉県越谷市を例にとると、市全域を埋めるためには、32枚の地図が必要となり、図としても広いスペースをとるという不便さがある。このため、現状では地域学習の基本資料としては、2,500分の1と10,000分の1の地図の併用を考えるとよいと考える。

ここで、10,000分の1の越谷市の地図と筆者の現任校の越谷、北中学校の袋山地区の2,500分の1の基本図をとりあげて考察してみよう。前述のように2,500分の1の地図では、一軒一軒の家の形や大きさまでがわかる。基本図の中では元荒川の自然堤防と旧流路の土地利用の違いが明らかである。自然堤防上では、比較的規模の大きい古くからの家屋が散在しており、旧流路には規模の小さい新興住宅が規則的に密集していることが分かる。

土地利用の面では、自然堤防上には畑地や屋敷

林が多く、旧流路は水田や新興の住宅地としての利用が顕著である。このことは、土地の地盤の高低の差と開発の歴史的関係を物語るものである。

土地利用図（50,000分の1、国土地理院発行）は、大縮尺の地形図とともに、地域の産業を中心に地域の概要を捉えさせるのに有益である。最近国土地理院発行の全国の土地利用図が簡単に手に入るが、市販のものを購入して利用するだけでなく作業学習を大切にしたいものである。このため、目的に応じて大縮尺の地形図を児童・生徒に分担させ、着色の作業をさせる。こうしたことは地域の概要を土地利用の面から基本的に理解させる上で欠かせないことである。

迅速測図は縮尺20,000分の1で、明治20年陸軍測地部作成によるものである。現在の20,000分の1の地形図と迅速測図を比較すると、現在の地域と明治期の地域との変化が読みとれる。明治20年といえば、関東地方の大方の所は、江戸時代の景観を残す所がほとんどである。このため、現在の地形図との比較をすることは江戸時代との景観の変化を読みとることであると言っても過言ではない。故に、迅速測図は地域の歴史を読み取る上で大切な地図であると言える。また、迅速測図の作業から近世の地形を想起することができる。筆者は、迅速測図の田や畑の土地利用を色分けする作業を行ったことがある。迅速測図の作業では、近世から近代にかけては、地形における人工的な改変は少ないので、田畑の色のぬり分けにより微高地と低地の分類ができる。迅速測図の作業により古い時代の地形分類図ができる例である。

さらに、地域学習のための歴史的な地図としては、迅速測図の他に絵図がある。絵図の種類としては、村絵図、地籍図、行政文書に添付されている県や市町村の地図類が挙げられる。

絵図を地域学習の地図として利用する日安として、埼玉県においては、埼玉県立文書館資料案内第14号「目で見る埼玉の村や町のすがた」（1990年刊）が重宝である<sup>9</sup>。この中には埼玉県の代表的な村絵図、地籍図、街道絵図、近代に入ってから地籍図が収録されている。この資料案内の中に、村絵図から土地利用図を作成したものが載せられているが、これは地図作業の方法としてたいへん参考になるものである。

## 8. 地図指導の実際

### (1) 中学校の身近な地域の指導事例

筆者が埼玉県越谷市立富士中学校における身近な地域の指導を行った事例をもとに地図指導の実際について述べる。〈資料2〉

まず、越谷市の概観をするのであるが、越谷市の位置を掛地図、地図帳でおさえ東京との関係を意識させる。越谷市の概観、更に富士中学校周辺の概況の把握は、地図と航空写真により行う。

地図は越谷市発行の17,500分の1「越谷市案内図」を利用したが、これは越谷市の自然と人文の総合された地図であり、越谷市の概況を把握するのに適切であると考えられる。

富士中学校の学区を中心にした航空写真があるが、これは1971年（昭和46年）中学校開校当時のカラーの斜め写真であり、学校周辺の南越谷地区の開発がよく読み取れる写真である。中学校の南に武蔵野線、東に東武伊勢崎線が走っており、その沿線には住宅が密集し、住宅の過密化が伊勢崎線の沿線を中心に進んでいることがわかる。武蔵野線と伊勢崎線の交叉する位置にはJR南越谷駅と新越谷駅があり、交通機関の位置から駅周辺の発展が予想できる。

富士中学校は南越谷駅、新越谷駅から北西の方向にあるが、学校の北から東にかけて出羽堀が流れている。出羽堀はこの地域の開発の歴史に関係の深い堀であり、現在は排水路専用になっている。この堀を境として、南側と西側が農業調整区域で住宅建設の制限を受けている地域であり、航空写真からもこのことがよく読み取れる。農業調整区域には水田が多い。以上の顕著な点を越谷市の概観における指導では、生徒に気づかせたい。

さらに、10,000分の1の越谷市の地図を使って読図と作業を行い越谷市への理解を一層深めたい。

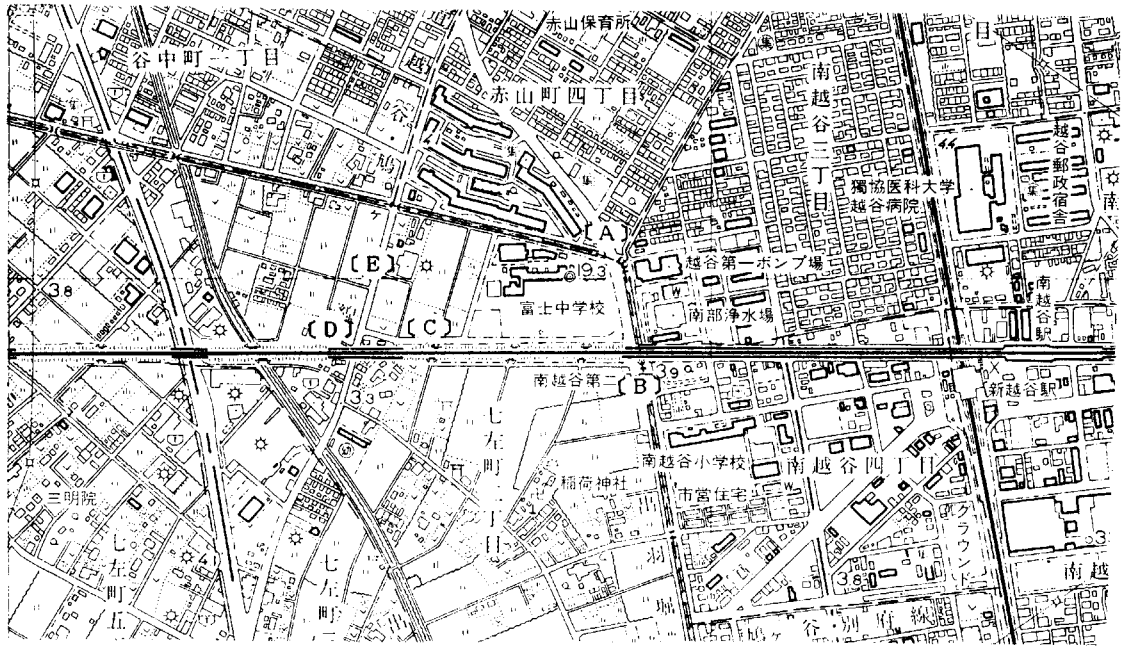
地図の縮尺、方位、距離については、10,000分の1の地図に生徒各自の家の位置を記入させ、富士中学校よりの方位、距離を生徒に発表させる。土地の高さについては、道路上の標高点から読み取らせる。一般に地形図では高さが等高線で表わされるが、越谷市は平野部に当たるので、標高点を中心に高さを読みとらせ、参考までに山地の地形図を見せて、等高線の意味についても理解させる。

<資料2-1>

「身近な地域」の展開例 (10時間扱い)

内 容	ね ら い	留 意 点
1. 越谷市の概観 (第1時) ・関東地方における越谷 ・越谷市をながめて ・富士中学校の周辺	・関東地方の地図により、越谷市が東京と私鉄で結ばれた近郊都市であることを理解させる。 ・越谷市は平野部の中にあり、周囲が川で囲まれた地域であることに気づかせる。	・地図帳「関東地方」 } 使用 ・1:17,500「越谷市案内図」 } 用 ・航空写真「富士中学校周辺」をじっくりながめさせる。 ・主な川の位置を確認する。 ・主な交通網は南北に走り、その周辺に住宅が密集することに気づかせる。
2. 大縮尺の地図の読図と作業 (第2・3・4時) ・地図の縮尺、距離、方位 ・土地の高さ ・地図記号 ・特色ある地域や地形の読図 ・土地利用図 ・身近な地域の特色の読図	・地形図のきまり、縮尺、方位、距離を理解させる。 ・高さの表現のしかた、主な地図記号について理解させる。 ・土地利用図を作成し、学校周辺の特色を読みとらせる。 ・住宅の分布の特色を読みとらせ、密集の傾向の原因を考えさせる。	・1:10,000「越谷市」使用 ・学校から自分の家までの通学路を記入させ、距離、方位を具体的に知らせる。 ・地図記号の学習は、「越谷市」の地図を中心にする。 ・越谷市は、低平な地形のため、山地の地形図と比較し、等高線の意味を明らかにする。 ・学区内の土地利用図を各自に作業させる。作業の区分は、田、畑、住宅、学校、官公庁、工場等とする。
3. 学校周辺を歩く (野外観察発表会) (第5・6時) ④出羽堀の利用 (家庭・工場排水) ⑤水田と排水 ⑥畑の利用 ⑦農家のようにす ⑧工場の位置	・出羽堀の汚染の状態が何によるか観察、原因を考えさせる。 ・水田と出羽堀の関係を観察させる。 ・畑にはどんな作物が栽培されているか。又、畑として利用されているのは、どんなところか。 ・農家の構えと、仕事の様子を観察する。 ・工場の内容、規模、工場のある場所を観察する。 ・観察の結果をまとめ発表する。	・出羽堀への排水口に注目させる。 ・田の排水路と出羽堀の接点を見つけ、観察させる。 ・畑は自然のものか、人工的な盛土かに注目させる。 ・都合がつけば、農家、工場でききとりをさせる。 ・工場用地はどのようにしてつくられたかつかませる。 ・水田が埋め立てにより、宅地化、工場地化しつつある傾向に気づかせる。 ・出羽堀の役割をその周辺の土地利用を中心にまとめる。
4. 越谷の歴史 (第7時) ・越谷史の概観 ・越谷の近世 (宿場町) ・出羽堀、七左町の歴史	・越谷に人々が生活しはじめたのはいつからか、その後の歴史の主な流れを理解させる。 ・越谷市が全国的な役割を果し出したのはいつ頃か。天領として、あるいは交通位置の重要性を理解させる。 ・近世以降の農業開発により、学校周辺の土地が発展してきたことを理解させる。	・「越谷市概略年表」の使用 ・江戸時代の歴史との関連をはかる。 ・交通位置の重要性が現在にもつながることの伏線とする。 ・要覧「こしがや」の使用
5. 現在の越谷 (第8・9・10時) ・都市の性格 (住宅都市) ・人口の変化 ・土地利用 ・産業構成 越谷市の問題 (財政難、公害等)	・越谷市主要統計より人口増加の著しいところから、都市の性格を規定する。 ・人口の増加の原因について考えさせる。 ・人口の変化、土地利用、産業構成をグラフ化し、越谷市について具体的に理解させる。 ・人口増加、都市化に伴う問題点は何か考えさせる。	・「越谷市統計資料」使用 ・グラフは内容により、円グラフ、棒グラフ等に工夫させる。 越谷市の問題を話し合いにより知らせる。 ・問題点については、3年の「地方自治」の学習へ発展させる。

〈資料 2-2〉



10,000分の1の地図をグループごとに地域を分担させて土地利用図を作成させる。土地利用の区分は、田、畑、住宅、学校、官公庁、工場とする。作業の目的は、地図記号の理解を図ることと、土地利用を通じて越谷市の概況を捉えさせることである。特に、住宅の分布の傾向を読み取らせることは、住宅都市としての越谷市の特色、都市化の進行を理解させる点で重要であると考えられる。

以上の10,000分の1の地図の読図と作業を生徒個々及びグループに対して1枚の地図に集中して行わせることは、地図理解を深め地域の概況を捉えさせることに有益である。

地図作業を終え、越谷市の概況を捉えた後で、富士中学校周辺の野外観察に出かける。野外観察の地点は、1時間以内の地点で学校周辺のルートマップ上の〔A〕～〔E〕の5地点とする。

〔A〕 出羽堀の利用

現在の出羽堀が深く掘り込まれ、排水路としての性格を強くしているだけでなく、雑排水の処理場となっていることに気づかせる。洗剤、工場排水、ごみの混入等から越谷市の都市化の進展が従来の農業排水路にまで変化を与えていることに注目させる。

〔B〕 出羽堀と水田の排水路の接点

出羽堀と水田の排水路の接点を観察させ、本来の出羽堀の用途を理解させる。各水田で不要になった農業用水の排水路、落とし堀であったことに気づかせる。排水口が堀の底より高く落差があり、このことにより落とし堀の由来に注目させる。

〔C〕 畑の作物

水田中に小高い盛り土部が何か所かあり、作物の栽培が見られる。生徒の通学路の途中でもあるので四季の作物の栽培の変化については記憶している生徒も多い。豆類、蔬菜類、最近では畑の周辺には植木の栽培も見られる。畑の作物の観察と同時に、この畑地が人工の盛り土か自然のものかを観察させる。そして、畑地と水田の境の土止め部がブロック等で仕切られている点から、水田に他所からの土を運び込み、低地の中に人工的に作られた畑地であることに気づかせる。

〔D〕 農家の観察と聞きとり

武蔵野線北側の農家の観察と聞きとりを行わせる。家屋の配置と屋敷林の位置に注目させる。屋敷林は家屋の北と西側を中心に茂っている。前もって連絡をとっておいた農家の主婦から農業の様子を聞く。当時の生産は米中心であったが、現在は兼業農家になってきている。

〔E〕 工場の観察

越谷から川口へ向かう赤山街道沿いの工作機械の工場の観察をする。水田の中の埋め立て地に建設された小規模な工場であり、東京方面からの移転であることが想像できる。

以上の野外観察を終え、生徒の観察や聞きとりの結果をもとに発表会を行う。よくわかったこと、感想・疑問点を話し合わせまとめとする。発

表会までの身近な地域の学習が地理的内容を多く含み、地図指導に関わりの深い所であり、この学習を土台にして、越谷市の歴史、越谷市の都市問題への発展として捉えさせていく。

(2) 地誌学習における地図指導の応用事例

南九州の農業とシラス台地の学習についての地

〈資料3〉

○学習指導案「南九州の農業とシラス台地」

①小々単元名「南九州の農業とシラス台地」

②目標 ●南九州の農業の特色とシラス台地の利用と開発のかかわりを理解させる。

③展開

段階	学習内容	学習活動	形態	指導上の留意点	資料
問題をつかむ	1 南九州の農業について知っていることは何か。 ①主な農畜産物 ・さつまいも・茶 ・たばこ・豚・牛・にわとり ②農畜産物の盛んな理由 ・歴史的背景 ・地形-シラス台地 ・温暖な気候	・自分が見たり、聞いたりして知っていることを発表する。 ・畑作や畜産の盛んな理由を発表する。 ・農畜産物の様子を知る。	評価 一斉 個別	(※は自己教育力を育てる手だて) ・南九州の範囲を示し、既有的知識を確認する。 ※農畜産業の様子を見せ、学習の興味を増したり、農業の特色を考える伏線とする。 ※北九州との農業の違いから、農畜産業の背景を予想する。	・掛地図「九州地方」 ・写真「さつまいもの収穫」「養豚団地」「シラス台地の開発」
	2 シラス台地はどのような所だろうか。 ①シラス台地の地形 ・地質 ・50~100mの台地 ・火山灰地 ・鹿児島県の約52%を占める ②シラス台地の災害 ・吸水性が強い ・崖崩れ	・シラス台地の広がりや、地図から見つけて発表する。 ・シラス台地の恐ろしさを生徒作文より知る。 ・シラス台地の自然の特徴を整理する。	一斉 一斉 個別	・シラス台地が南九州の広い部分を占めるものであることを地図上で確認する。 ・シラス台地が時として、大きな被害をもたらすことを実感させる。 ※シラス台地の地形、地質の特徴を各自に整理させ、農業の条件となる伏線とする。	・地図帳「シラスの分布」 ・①生徒作文「恐ろしいシラス台地」 ・②作業プリント「シラス台地の特色」
追求する	3 南九州の畑作と畜産はどこで行われるか。 ①南九州の畑作と畜産 ・鹿児島県北部の畜産 ・笠野原台地の畑作 ・薩摩半島の畑作 ②シラス台地の開発 ・シラスの利用 ・笠野原の開発 ・多角経営	・白地図に九州の農畜産物を抜き書きし、分布の特色を見る。 ・白地図の作業で北九州と南九州の分布の違いを見つける。 ・鹿児島を中心に畑作や畜産がシラス台地の広がりや関係のあることを見つけてみる。 ・笠野原の開発の様子から農業の発達、多角経営の姿をつかむ。	個別 個別 グループ 一斉	※白地図に農畜産物の名を抜き書きするのは個人差が大きいので、机間指導で補う。 ※作業の遅い生徒には、作業の援助をし、早い生徒には分布の傾向を線でくくらせる。 ・台地の広大な所は畑作による開発が手一杯で、低地のある所には畜産に力が注がれていることに気づかせる。 ・笠野原台地の開発から農業が発達したり、多角経営が可能になってきたことに気づかせる。	・③地図「九州の農畜産物」 ・④地図「シラス台地の分布」 ・⑤年表「笠野原の開発」
	まとめ	4 鹿児島島の農業はどう変わっているだろうか。 ①畑作から畜産へ ・さつまいもから養豚へ ・零細農家の圧迫	・開発の様子から農業の変化をつかむ。 ・農業の変化から、鹿児島島の農業の問題点を考える。	一斉 個別 評価	・学習の流れから、農業の変化が言えない時は、帯グラフから変化を読みとらせる。 ・農業の問題点について、資本や流通のかかわりについては深入りしない。

○本時の観点別評価基準

- ア 知識・理解……南九州の農業はさつまいもを中心とした畑作と畜産が盛んである。この農業の背景にシラス台地の利用と開発があることを理解させる。
- イ 資料活用能力……地図帳から主な農産物を読み取り、白地図に記入し分布の傾向がわかる。
- ウ 社会的思考・判断……南九州の農産物の分布の特色がシラス台地の形態と関係の深いことがわかる。
- エ 社会事象に対する関心・態度……南九州の農業が畑作から畜産中心に変化する状態をつかみ原因について考えられる。

○「南九州の農業とシラス台地」で主に使う資料（番号は展開の資料欄に対応）

（資料①）生徒作文「恐ろしいシラス台地」

今度の台風でシラスが多くの人々の命を奪った。4日間も振り続いた豪雨でシラスは水をたっぷり含みもろくなり、崖が上の方から次々と崩れ落ちた。

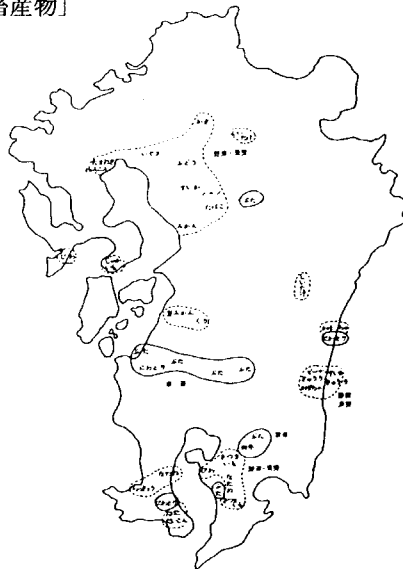
ものすごい地鳴りとともに水をたっぷり吸い込んだ土砂の流れが近所のアパートを直撃し、3人が死に、2人が行方不明となった鴨池町（鹿児島市）の崖くずれの現場を僕は見た。

危機一髪のところを脱出した男の人が、「突然、洋服ダンスが倒れ、天井がバリバリと音をたてぬげ落ちた。レコードボックスと洋服ダンスのすき間に助けられてはい出した」と恐怖の様子を話した。消防ポンプがうなりをあげ、屋根下にたまったシラスを吹き飛ばす。「あの中にうちの子が……」と泣き叫ぶ声もかき消される。「こんな恐ろしい所にもう住めん」のずぶぬれの女の人がつぶやく。「雨が降ると爆弾をかかえているような気がする。」と女の人は繰り返しつつやく。

（資料②）作業プリント「シラス台地の特色」

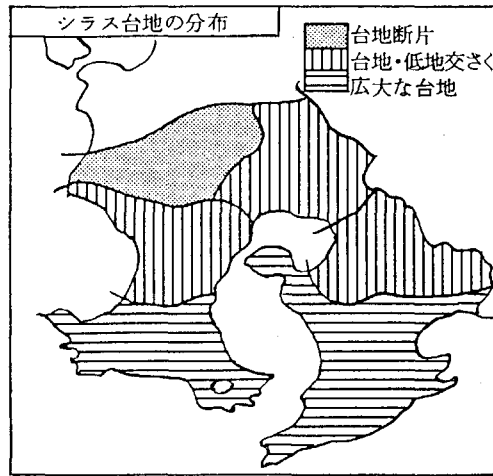
- 広さ 鹿児島県の面積の（ ）%
- 高さ （ ～ ）Mの台地
- 性質 （ ）を透し易い  
水を吸うと（ ）
- 主な層 ボラ層…（ ）状の層→（ ）半島北部  
コラ層…（ ）状でかたい（ ）半島南部

（資料③）地図作業「九州の農畜産物」





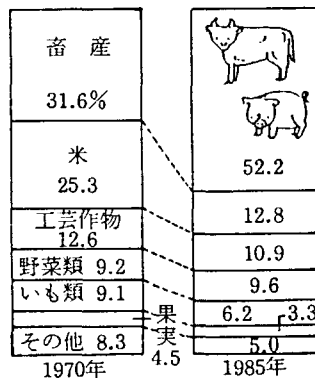
(資料④) 地図「シラス台地の分布」



(資料⑤) 年表「笠野原の開発」

- 江戸時代末——原野に島津藩が入植。深井戸（33～100M）を掘る。
- 大正時代初——耕地は台地の半分に満たない。
- 1927（昭和2）年——上水道が引かれる（飲料水の確保）
- 1955（昭和30）年——国と県による灌漑用水事業計画。高隈川上流にダム建設。
- 1971（昭和46）年——台地上53kmの水道管を引く工事が完成（国による）。
- 1973（昭和48）年——73kmの水道管の支線が引かれる（県による）。3,500戸の農家の耕地（約3,000ha）がいつでも水をやることができるようになった。

(資料⑥) 帯グラフ「鹿児島県の農畜産物の変化」(鹿児島県の農畜産額の割合：鹿児島県庁資料)



図指導の実践について述べる。〈資料3〉

学習の導入については、南九州やシラス台地のイメージを豊かにすることに努める。イメージづくりの代表的なものは、写真等を始めとする視覚資料の力に訴えることである。イメージづくりに

は、生徒の既存の知識、経験を聞き出したり、教師の話によることが多い。

地域のイメージを豊かにすることは、学習意欲を喚起することに役立つ。イメージづくりの次には、地誌学習を通して主な地名の確認をする。南

九州，シラス台地，笠野原台地等を掛地図や地図帳で確める。

南九州の農業の性格を明確にする意味で，九州の農畜産物の分布図を作成する。九州の地勢図をトレース，農畜産の分布を記入させ野菜，果実，畜産等の同種類のものを線でくくり，分布の傾向を区分する。この分布図作成作業により，南九州側に畜産と畑作の盛んな地域のあることを生徒へ気づかせる。

南九州の畜産と畑作に偏りがちな地域の分布について，その背景を自然，人文の両要素からおさえる。ここでまず関連が考えられるのがシラス台地の分布である。シラス台地については，その台地の性質と形態の特色から利用の関係を見る。シラス台地分布図によると，広大な台地に対する農業開発は困難な点が多く，台地・低地の交さく部に農畜産の開発が進んでいることがわかる。

2つの台地の開発の実態を細かく見ていくためには，笠野原台地の地形図を読み取らせることが必要である。

笠野原台地の開発の要点は大隅湖の貯水による用水路の整備にある。途中いくつかの調整池，ポンプ場の設置により台地全面に灌漑がいき渡ったことである。このことにより今までの不毛の台地に畜産を始めとして，野菜，花木，桑，茶，飼料作物等の多様な作物栽培が可能になったのである。南九州，殊に笠野原台地と言えば畜産と畑作物に代表される地域となっているが，肝属川，串良川沿いの稲作についても見落としてはならない。北九州の低平な平野部の多い地域に比べ，シラス台地の広く分布する南九州は，利水の面で稲作の地域は少ないが利水の可能な限り稲作づくりが行われる。

以上，南九州の農業とシラス台地の学習について地図指導を中心に述べてみた。

## 9. 地図の収集と保管

地域学習のための地図の収集の心得としては，日常生活をとりまく中にある種々の地図帳に関心をもって積極的に収集させることである。新聞の配達と共に配られてくる宣伝用の地図や旅行社等で配られる観光地図も粗末にできないであろう。

地域学習の地図類は関係市町村の行政機関に当

たってみると多様な地図類が発行，所蔵されていることがわかる。学習の目的を明確に連絡し，総務，都市計画，建設，農業等の各セクションに丹念に当たっていくと多くの地図が収集できる。

中・大縮尺の地図を計画的に収集していくためには，国土地理院発行の地図を調べ，関係の発売機関や書店により購入することになろう。

収集した地図を活用していくためには，整理，保管の仕方が大切である。マップ・ケースのボックスに地方別に整理，保管していくのが一番よいと考える。ただし，地図もその枚数が多くなると相当なボリュームとなるので，表示を明らかにして折りたたむ場合等もでてくるであろう。その場合にも，地方別に整理したり，社会科の学習単元別の地方に整理すると活用が容易である。

## 10. おわりに

以上，地域学習における地図指導の在り方について述べてきたが，このテーマに対する今後に残された課題について述べると以下の通りである。

地域学習の社会科における必要感の問題である。従来からの郷土学習，最近における身近な地域学習は，たて前としては必要とされながらも実際の指導は十分になされてこなかったという実態がある。この理由として考えられるのは，地域学習の指導の際の資料集めの大変さである。

地域学習が児童・生徒に郷土愛を育てたり，学習を通じて社会科学習の方法を体得させる上で大切な学習であることを再確認したい。このため，地域学習を担当する者として，自らが担当する地域の理解を一層深めること，さらに地域学習指導の主要な方法である地図指導の技術に習熟することに努めたい。このことは社会科担当教員に強く訴えたいことである。

本稿は，平成3年8月20日に行われた埼玉県教育委員会，埼玉県社会科教育研究会主催の小・中学校地域学習研修会の講義内容を整理したものである。

筆者は，昭和38年4月から1年間お茶の水女子大学地理学教室に助手として奉職した。その当時からご指導いただいた式正英教授のご退官に当たり，現在，義務教育に奉職する者のささやかな実践報告ではあるが，先生へ献呈する次第である。

注・参考文献

- 1) 浮田典良(1989)：新聞に載っている地図の活用，地図・地理の研究，1月号，帝国書院，P.6－7.
- 2) 寺田寅彦(1961)：地図を眺めて.『寺田寅彦全集 9巻』岩波書店，P.73.
- 3) 大久保武彦・中野尊正(1965)：『地図の教室』古今書院，P.115.
- 4) 菊地利夫(1960)：『地理学習の原理と方法』金子書房，P.48－49.
- 5) 前掲書 P.34－36.
- 6) 田中耕三(1978)：『作業地理教授の原理と実践』古今書院，P.148－150.
- 7) 前掲書 P.150.
- 8) 財団法人河川情報センターでは建設省関東地方建設局等の作成の直轄河川防御対象氾濫区域図を希望により提供している。
- 9) 埼玉県立文書館では，県内の学校及び公共機関へ向けて年に1回，資料案内「目で見える埼玉の村山町のすがた」を発行している。平成3年度に第15号を数えているが，第14号で絵図について特集している。

Effective and Practical Use of Maps in Regional Studies in Compulsory Education  
—A Report on Guidance and Practice—  
Takanori HARA